

## モノ

分身ロボット  
OriHime®

## IoT

ロボットテクノロジー、Wi-Fi  
Bluetooth、クラウド、視線入力※

## コト

孤独化の要因となる「移動」「対話」「役割」などの課題をテクノロジーで解決し、これからの時代の新たな「社会参加」を実現

## 会社概要

株式会社オリィ研究所
代表取締役 CEO 吉藤 健太郎
所在地 東京都港区芝 5-1-13 ミツ輪三田ビル 6F
資本金 1億3,982万円 従業員 15名
事業内容 コミュニケーションテクノロジーの研究 開発および製造販売
URL <a href="http://orylab.com/">http://orylab.com/</a>

代表者が高校時代に電動車椅子の新機構の発明に関わり、高専で人工知能を学んだ後、早稲田大学創造理工学部へ進学。自身の不登校の体験をもとに、対孤独用分身コミュニケーションロボット「OriHime®」を開発。このロボットを多くの人に使うべく、株式会社オリィ研究所を設立。自身の体験から「ベッドの上にながら会いたい人と会い、社会に参加できる未来の実現」を理念に開発を進めている。

## ● 事業展開に至る経緯

(株)オリィ研究所は、代表者が幼少期に入院したことをきっかけに学校に通えなくなり、3年半の不登校を経験したことで感じた“孤独”という社会課題の解消を理念に掲げ、2012年に立ち上げられた会社。教室に行きたくとも行けなかったこと、友達と同じ行事に参加できないことが本当に悔しく、「なぜ身体がひとつしかないのだろう。身体がいくつもあればいいのに」と感じた経験から「OriHime®」は開発された。近年、目の動きだけでPCや「OriHime®」を操作し、会話ができる「OriHime eye」も開発、製品化された。「OriHime®」や「OriHime eye」はテレワーク、遠隔授業参加、ALS（筋萎縮性側索硬化症）など身体を動かしたり話すことができない難病患者の方のコミュニケーション補助に使われている。

## ● IoTを使ってモノからコトへ

分身型ロボット「OriHime®」は、単なるロボットやAIではない。「ロボットと人ではなく、人と人をつなぐロボット」というコンセプトで造られている。「OriHime®」は、ユーザーがiPhone、iPadを使用してOrihimeアプリにより簡単に遠隔操作でき、置かれている場所で双方向のコミュニケーション（音声・画像・動作）を行うことができる。

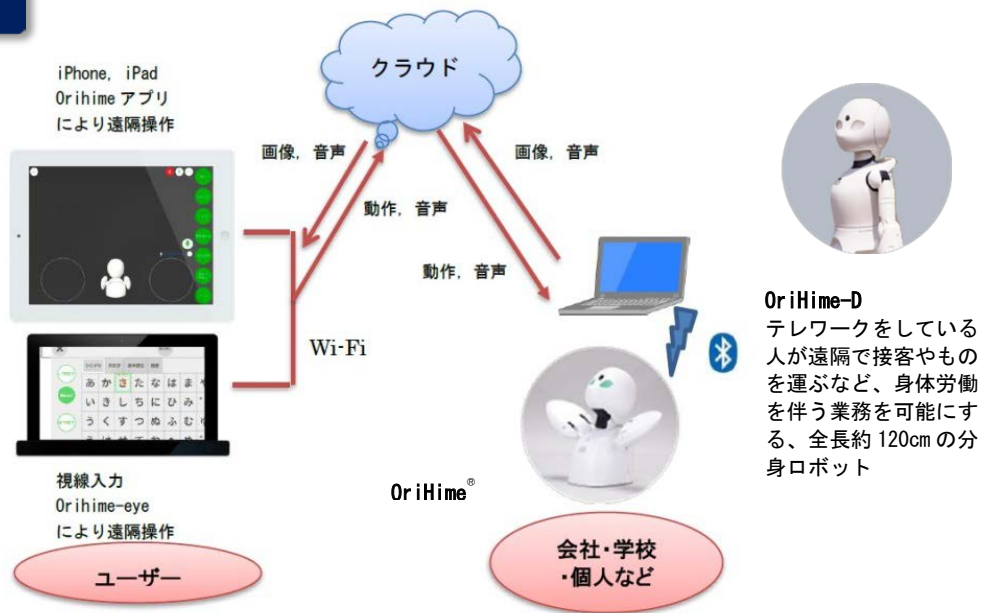
「OriHime®」を遠隔操作することにより、その場に自分が存在しているような感覚と、自分の音声、拍手などの手や首の動作などの多感な感情表現を通じて周囲にも、その場にあたかも自分が存在しているように認識してもらうことができる。「OriHime®」をオフィスや学校に設置していれば、職場であれば同僚とコミュニケーションを取ることができ、学校であれば教室で友達と席を並べ、授業を受けることができる。分身により、友達をつくり、思い出を残すことができる。

※ 視線入力：画面に表示されている文字を見る（視線を向ける）ことによりその文字が入力できるシステム

## ビジネスイメージ

### OriHime-eye

眼や指先しか動かせない重度肢体不自由患者のための意思伝達装置。透明文字盤をデジタル化したシンプルな操作方法で、PC操作をスムーズに行える



### OriHime-D

テレワークをしている人が遠隔で接客やものを運ぶなど、身体労働を伴う業務を可能にする、全長約120cmの分身ロボット

## ● ユーザーとの価値づくりのポイント

「OriHime eye」は利用される難病患者の方のニーズを重視し、顧客の生の声を開発に活かせるような体制を整えている。具体的には、意思伝達装置担当のスタッフを配置して、代理店や、フェイスブック、サポートセンターへの問い合わせからフィードバックを得ている。

また、「あらゆる人たちに社会参画、仲間たちと働く自由を」というコンセプトで、2018年11月から12月にかけて「OriHime-D」（テレワークをしている人が遠隔で接客やものを運ぶなど、身体労働を伴う業務を可能にする、全長約120cmの分身ロボット）を使用して「分身ロボットカフェ」の公開実証実験を行った。これにより、カフェでの接客やビル内での案内、作業現場を見回りながら指示を出すなど、身体を動かす必要のある業務のテレワークが実現可能となった。現在、同社では、この「OriHime-D」のさらなる可能性を探るべく、共同での事業開発・研究等が可能な企業・研究機関を広く募集している。

## 知財戦略

視線入力「OriHime eye」でソフトウェアやユーザーインターフェースで特許取得。

「OriHime-D」で特許出願を検討中。

「OriHime-D」の開発に際しては、他の企業・研究所等との連携、及び実証実験の実施を必要とするが、知的財産の適切な保護のためには連携先との間で秘密保持契約を締結するとともに、公開前に特許出願を済ませることが重要となる。

## ● サービス・ドミナント・ロジックの視点

- 多くの局面での社会参加を可能にする分身ロボットには、きわめて高い存在意義がある。
- しかし、分身ロボットは、あくまでもモノ或いはツールであり、今後、人と人、企業と人の中で交わされるコミュニケーションそのものに如何にして関与するかが課題となっている。
- 何故なら、分身ロボットを使う人も企業もコミュニケーションを通じて共創される新たな価値にこそ、その関心があるからである。
- 言い換えれば、同社が標榜するコミュニケーションテクノロジーの研究開発の範囲をどこまで拡大するかということであり、それは、同社にとって、まさに戦略的意思決定となり得る。特にユーザーが企業の場合は、そのことの重要性は大きいといえる。